

目的 日本の伝統的住宅の開放性は建具と深い関わり合いを持っている。現在の住宅は個人のプライバシー尊重から閉鎖性が強調されて建具は軽視されている。また一方では既製サッシの普及により建具の個性がなくなり画一化されている。本稿では本来の建具と住宅および住まい方との関係を考察するため、民家を調査し、その建具の特性を検討する。

方法 川崎市に現存する茅葺民家30戸を対象に、現状平面・建具等の採集、写真撮影ならびに住まい方の聞き取り調査を実施した。調査期間は昭和59年8月から1年間である。

結果 1) 調査民家は大部分が明治以降に建設された整形四間取り農家である。建具の多くは木製の引き違い戸で、ガラス戸、障子戸、格子戸、襖戸、板戸の型に大別される。2) 建具は外縁部から縁側、土間、室へと内縁部に向かって順次、ガラス戸、障子戸、格子戸、襖戸、板戸が使用されている。3) 建具の型は二室の機能の組合わせによって決定される。㊦と㊧境や㊨と㊩境の遮断性が強いところでは板戸や襖戸、㊦と㊧あるいは㊨境には格子戸、㊦と㊧境、㊨境の連結性が強いところでは障子戸やガラス戸が採用される傾向が強い。民家にみられる機能分化は建具の型の使い分けによって可能になっている。4) 建具のデザインは直線が基調でシンプルさが特徴的である。デザインは障子戸50、ガラス戸39、格子戸15パターンと豊富で、それらの組合わせにより室内の雰囲気は変化し、また建具間の調和も保たれている。建具のデザインは単体としては繊細であるが、集合体になると重厚さが発揮される。建具は外観ならびに室内のデザインに大きな影響を及ぼす。5) 民家でみられる建具は空間の機能を保障し空間を豊かにデザインする重要な構成要素である。